

MASTERPIECE

⟨December 1999⟩

●歯科医療の奔流—地球規模での歯科医療に貢献するために—

大畠一成

(歯科技工士マイスター)
エステティックラボラトリー 雅
東京都新宿区市谷薬王寺町75-2F



1



2



3



4



5



6

Prolog

図1～6 Vintage Halo SystemによるWinter Situationの表現。

I. *Procera® Allceram & Vita α* (症例担当 : Dr. med. Paulus / Dusseldorf, Germany)



図7 シェードティキングの際、ガミー(歯肉ホルダー、松風)を用いて歯肉の色調を選択した後、歯牙の色調を分析する。



8



9

図8、9 *Procera® Allceram* のキャップ上に、*Vita α* ポーセレンを焼成、完成させる。

II. *Empress* (症例担当 : Dr. med. Paulus / Dusseldorf, Germany)



図10 隣接的間隙が大きい症例。



11



12



13

図11～13 ハーフポンティック形成法を応用し、*Empress* にて対応。

III. Vintage Halo System (症例担当 : Dr. Schwabe / Dusseldorf, Germany)



図14、15 最初に必ずガミーを用いて歯肉の色調を選択し、その後、歯牙の色調を分析する。



図16 Vintage Halo ポーセレンによる1の補綴。



図17 歯間鼓形空隙を塞ぎ、表面性状を追求する。



図18、19 1| Vintage Halo。トライアングル形態は、ゲラー・ノーズ法にてある程度、歯間鼓形空隙を塞ぐことが可能となる。



III. Vintage Halo System (症例担当 : 谷澤和紀先生 / 東京都、谷沢歯科医院)



図20 1、3が近心へ傾斜し、2の間隙が減少した症例。



図21 3～1のVintage Halo メタルセラミック・ブリッジ。

IV. Technik (症例担当: Dr. Bartsch/Düsseldorf, Germany)



図22、23 ガミーを使用したシェードティкиング。



図24 上顎二次模型。歯間乳頭部の間隙が大きいことが観察される。



図25 下顎前歯部も同様に間隙が大。メタルフレームは Galvano キャップを使用。



図26 Bio-Metal の歯頸部付近にゴールドボンディング・エージェントを使用する。



図27 ポーセレンマージン。



図28 烹盛は、歯肉の情報が観察可能な二次模型上で行なう。



図29 象牙質、象牙-エナメル質境界層まで烹盛し、焼成する。



30



32



31

図30、31 形態修整後、必ず三次模型上でコンタクト調整を行う。



33

図32、33 グレーズ後、後研磨を行ない、もう一度三次模型上で調整し、提出する。



図34 図32、33と同様、グレーズ後に調整する。



図35 口腔内装着直後の状態。

V. Lamina-System(松風)を用いた Ceramic Laminate 法

(症例担当 : Dr. Maierhofer / Dusseldorf, Germany)



36



37

図36、37 前歯部後退歯、および歯冠着色の改善により来院。



38



39

図38、39 Ceramic Laminate 装着後。



図40 スーパラ・マージンにもかかわらずマージン部は透明感を有する。



図41 患者の笑顔は何ものにも代えがたい。

審美補綴に言及し、口腔内組織に調和した歯牙をつくり上げるためにには、その模倣の対象となる歯牙、およびその歯周組織の構成と光学的特性を理解し、さらにその原料となるセラミックス材との相関的な関係、そして光学的特性を熟知し、相当する歯牙にもっとも適応するものを選択する力が必要となる。

ここでは材料物性の異なる3種のセラミック・システムを取り上げ、その臨床を紹介したい。

1. Vintage Halo
2. Procera® Allceram
3. IPS Empress

天然歯の有する三次元的層構造から発生する形態、色調、そして表面性状を模倣し、人間の手作業によって完璧

につくり上げることは非常に困難であることは間違いない事実である。ただし、将来、歯科技工学が確立され発達・進化することによって、誰もが高度な補綴物を製作することが可能になるであろう。

ゲーテが黄色いサフランの花を見つめ、ふと地面に眼を落とすと、突然、数点の青を観察し、色の補色現象を発見したと同様、対象物を深く分析し科学的に解明することが、歯科技工を學問として確立させる意味で、これからのが課題ではないだろうか。

さらには、アメリカ的経済指向性、および国際的経済危機の最中を生きるわれわれ歯科医療関係者にとって、“業界全体のレベルの底上げが行なわれなければ、斯界の発展はない”と肌で感じているのは筆者1人なのであろうか…

IV. 3i-Implant System

図42、43 ソリデックスを使用した長期プロビジョナルクラウンの製作。歯周組織の破壊により歯冠長を約3cmに設定し、フィクスチャー装着手術後、ヒーリングキャップとの接着を図るため、マージン部をレジンマージンとする。図43は同口蓋側観。



図44 3i-Implant-Gold、Plastik-Abutment を装着し、口蓋側マージン部をヒーリングキャップのカントウアに適応する形態にワックスアップし、2°のミリングを施す。

図45 Gold-Abutment の完成。

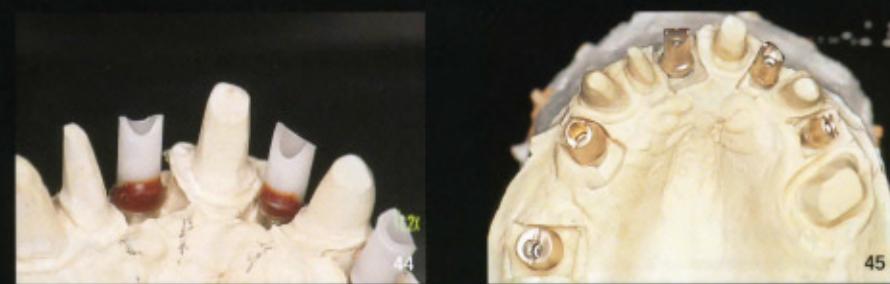


図46 臼歯部は6°のミリングにて対応。

図47 メタルセラミックス用合金を使用し、外冠フレームを製作する。

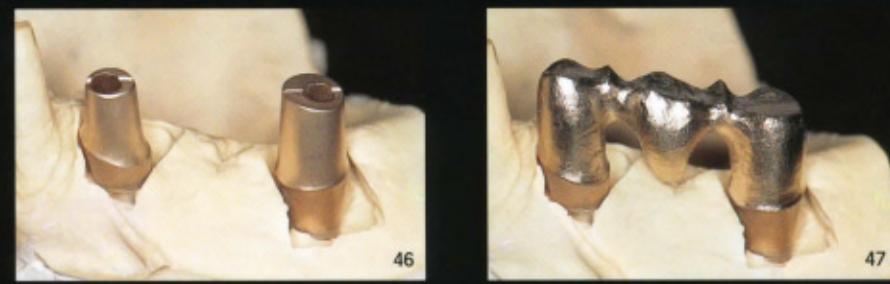


図48 メタルセラミック・ブリッジの完成(歯冠長約3cm)。



図49 残存歯との平行性、および咬合圧の緩衝を目的に、3カ所に自家製 Inter-Rook-Attachment を装備する。



図50 前歯部インプラント上部構造の仮着。



図51 臼歯部インプラント上部構造装着後の咬合面観。